

8.17 [水]

第595回 名曲シリーズ
サントリーホール/19時開演
Popular Series, No. 595
Wednesday, 17th August, 19:00 / Suntory Hall

指揮/セバスティアン・ヴァイグレ Conductor SEBASTIAN WEIGLE P.5

コンサートマスター/日下紗矢子 Concertmaster SAYAKO KUSAKA

メンデルスゾーン 序曲〈ルイ・ブラス〉 作品95 [約7分] P.7
MENDELSSOHN / "Ruy Blas" Overture, op. 95

シューマン 交響曲 第4番 ニ短調 作品120 [約28分] P.8
SCHUMANN / Symphony No. 4 in D minor, op. 120

I. Ziemlich langsam - Lebhaft - II. Romanze : Ziemlich langsam -
III. Scherzo : Lebhaft - IV. Langsam - Lebhaft

[休憩 Intermission]

ドヴォルザーク 交響曲 第8番 ト長調 作品88 [約34分] P.9
DVOŘÁK / Symphony No. 8 in G major, op. 88

I. Allegro con brio
II. Adagio
III. Allegretto grazioso
IV. Allegro ma non troppo

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
[助成] 文部科学省文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業)
(サントリーホール30周年記念参加公演)



8.23 [火]

第561回 定期演奏会
サントリーホール/19時開演
Subscription Concert, No. 561
Tuesday, 23rd August, 19:00 / Suntory Hall

指揮/セバスティアン・ヴァイグレ Conductor SEBASTIAN WEIGLE P.5

ソプラノ/エルザ・ファン・デン・ヘーヴァー

Soprano ELZA VAN DEN HEEVER P.6

コンサートマスター/日下紗矢子 Concertmaster SAYAKO KUSAKA

R. シュトラウス 交響詩〈ティル・オイレンシュピーゲルの
愉快ないたずら〉 作品28 [約15分] P.10
R. STRAUSS / Till Eulenspiegels lustige Streiche, op. 28

R. シュトラウス 4つの最後の歌 [約24分] P.11
R. STRAUSS / Vier letzte Lieder

I. 春
II. 9月
III. 床につくまえに
IV. 夕映えに包まれて

[休憩 Intermission]

R. シュトラウス 家庭交響曲 作品53 [約44分] P.14
R. STRAUSS / Sinfonia domestica, op. 53

I. Bewegt - II. Scherzo : Munter -
III. Adagio : Langsam - IV. Finale : Sehr lebhaft

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
[助成] 文部科学省文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業)
[協力] アフラック(アメリカンファミリー生命保険会社)
(サントリーホール30周年記念参加公演)



8.27 [土]	第190回 土曜マチネーシリーズ 東京芸術劇場コンサートホール／14時開演 Saturday Matinée Series, No. 190 Saturday, 27th August, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre
8.28 [日]	第190回 日曜マチネーシリーズ 東京芸術劇場コンサートホール／14時開演 Sunday Matinée Series, No. 190 Sunday, 28th August, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre

指揮／セバスティアン・ヴァイグレ Conductor SEBASTIAN WEIGLE P.5

クラリネット／ダニエル・オッテンザマー
Clarinet DANIEL OTTENSAMER P.6

コンサートマスター／長原幸太 Concertmaster KOTA NAGAHARA

ウェーバー 歌劇〈魔弾の射手〉序曲 [約10分] P.16
WEBER / "Der Freischütz" Overture

モーツァルト クラリネット協奏曲 イ長調 K. 622 [約25分] P.17
MOZART / Clarinet Concerto in A major, K. 622

- I. Allegro
- II. Adagio
- III. Rondo : Allegro

[休憩 Intermission]

ブラームス 交響曲 第1番 ハ短調 作品68 [約45分] P.18
BRAHMS / Symphony No. 1 in C minor, op. 68

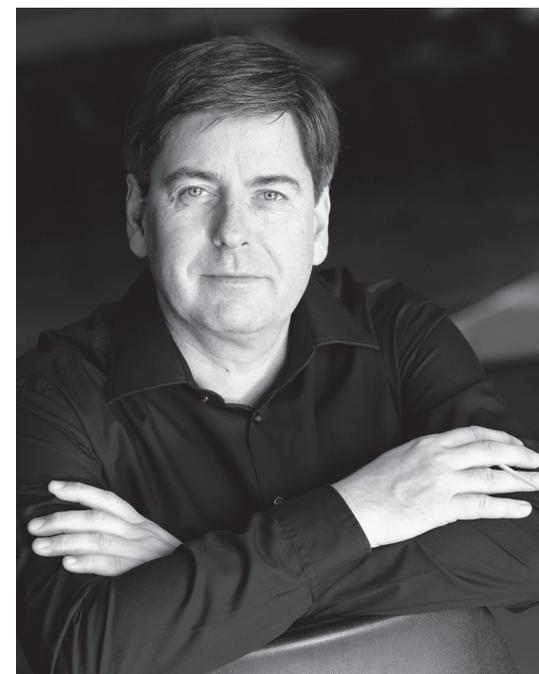
- I. Un poco sostenuto - Allegro
- II. Andante sostenuto
- III. Un poco allegretto e grazioso
- IV. Adagio - Più andante - Allegro non troppo ma con brio

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
[助成] 文部科学省文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）
[事業提携] 東京芸術劇場

セバスティアン・ヴァイグレ

Sebastian Weigle

ドイツを代表する名匠
読響に初登場



オペラとシンフォニーの両方でめざましい活躍をみせるドイツの実力派指揮者。読響初登場の今回は、シューマン、ブラームス、ドヴォルザーク、R. シュトラウスなど盛りだくさんのプログラムで腕前を披露する。

1961年ベルリン生まれ。ハンス・アイスラー音大でホルン、ピアノ、指揮を学んだ。82年にベルリン国立歌劇場管の首席ホルン奏者となった後、巨匠バレンボイムの勧めで90年代後半から本格的に指揮を始めた。2003年にフランクフルト歌劇場でR. シュトラウス〈影のない女〉を振り、ドイツのオペラ雑誌の「年間最優秀指揮者」に選ばれた。04年から09年までバルセロナのリセウ大劇場の音楽総監督を務め、07年にはワーグナー〈ニュルンベルクのマイスタージンガー〉でバイロイト音楽祭にデビューし、高い評価を得た。

08年からフランクフルト歌劇場の音楽総監督を務めている。ベルリン、ドレスデン、ミュンヘン、ウィーンの歌劇場やニューヨークのメトロポリタン歌劇場に客演を重ねるほか、ベルリン、ミュンヘン（バイエルン）、ウィーン、シュトゥットガルトの各放送響などヨーロッパの一流オーケストラを指揮している。特にワーグナーとR. シュトラウスの演奏では定評があり、エムス・クラシックスから多数のCD録音が出ている。読響初登場。

◇ 8月17日 名曲シリーズ
◇ 8月23日 定期演奏会
◇ 8月27日 土曜マチネーシリーズ
◇ 8月28日 日曜マチネーシリーズ



©Roberto Giostri

ソプラノ **エルザ・ファン・デン・ヘーヴァー**

Soprano Elza van den Heever

南アフリカ・ヨハネスブルク生まれのソプラノ。2007年にサンフランシスコ歌劇場の〈ドン・ジョヴァンニ〉のドンナ・アンナ役でデビュー。08年から13年までフランクフルト歌劇場に所属し、〈オテロ〉のデズデモーナ役、〈ドン・カルロ〉のエリザベッタ役、〈ローエングリン〉のエリザ役などを歌い、注目を集めた。

バイエルン国立歌劇場、パリ・オペラ座、チューリヒ歌劇場、シカゴ・リリック・オペラなど世界の主要歌劇場に出演。13年には〈マリア・ストゥアルダ〉のエリザベッタ役でメトロポリタン歌劇場デビューを飾った。読響初登場。

◇ 8月23日 定期演奏会



©Julia Stix

クラリネット **ダニエル・オッテンザマー**

Clarinet Daniel Ottensamer

1986年ウィーン生まれ。2009年からウィーン・フィルの首席クラリネット奏者を務め、若手のホープとして注目を浴びている。ソリストとしても活躍しており、15年にザルツブルク・モーツァルテウム管と共演したモーツァルト〈クラリネット協奏曲〉でCDデビューを飾った。

父のエルンスト（ウィーン・フィル首席）、弟のアンドレアス（ベルリン・フィル首席）も名クラリネット奏者で、3人でアンサンブルを組むほか、室内楽ではヴァイオリンのラクリン、チェロのマイスキーらと共演を重ねている。読響初登場。

◇ 8月27日 土曜マチネーシリーズ

◇ 8月28日 日曜マチネーシリーズ

8.17 [水]

道下京子 (みちした きょうこ)・音楽評論家

メンデルスゾーン
序曲〈ルイ・ブラス〉 作品95

作曲：1839年／初演：1839年3月11日、ライプツィヒ／演奏時間：約7分

フェリックス・メンデルスゾーン（1809～47）は北ドイツ、ハンブルク生まれ。ゲヴァントハウス管弦楽団の音楽監督のポストについた1835年からは、ライプツィヒを拠点に活動した。

〈ルイ・ブラス〉は、フランスの文豪ヴィクトル・ユゴーによる5幕の戯曲。メンデルスゾーンは、ライプツィヒの「劇場年金基金」から委嘱を受け、この戯曲の序曲を書き上げた（のちに、この序曲をもとにした二重唱曲〈ロマンス〉作品77-3が出版される）。戯曲の舞台は、16世紀スペインの宮廷。王妃に恨みを抱く侯爵が、王妃を陥れるべく、自身の部下ルイ・ブラスとの不倫をでっち上げようとする。ところが、王妃とルイ・ブラスは本当に愛し合うようになる。彼は王妃を守るため

に侯爵を殺害し、みずからも命を絶つというストーリーである。

4小節の厳かな和音によるコラール（レント、ハ短調）で、曲は始まる。その後アレグロ・モルトの部分で、のちの主部で奏される主題が登場する。コラール+アレグロの組み合わせが2回続き、3回目のコラールののち、主部に入ってゆき、主題をフルートと第1ヴァイオリンが軽快に歌わせる。再びコラールののちに変ホ長調に転じ、クラリネットとファゴット、チェロが低音で奏でられる二つ目の主題を示す。さらに、駆け上がるような動機を含む新たな主題を、ヴァイオリンが同じく変ホ長調でエネルギーに鳴り響かせる。作品は、メンデルスゾーンならではの透明な書法と気品あふれる音楽に満ちている。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

シューマン 交響曲 第4番 ニ短調 作品120

作曲：1841年（改訂：1851年）／初演：1841年12月6日、ライプツィヒ（初稿版）／演奏時間：約28分

ドイツ東部、ツヴィカウ生まれのロベルト・シューマン（1810～56）。彼の作品は、ジャンルごとに創作年代がはっきりと区別できる。交響曲第4番は「管弦楽の年」とされる1841年の作曲。妻クララの誕生日に贈られたこの曲は、本来は交響曲第2番となるべく、その年の12月に初演された。演奏を聴いたワーグナーは「退屈な作品」と評し、シューマンも「聴衆は拍手を惜んでいる」と述べ、出版を控えてしまう。この交響曲の改訂は、初演から10年後の1851年に行われた。

ちなみに、初稿の出版はシューマン没後の1891年。初稿を高く評価していたブラームスが、クララから楽譜を入手し、友人とともに出版する。ところが、彼女は出版に合意した認識はなく、ブラームスに激怒した。彼はピアノ小品集をクララへ贈り、これによって二人の友情は元に戻る。

改訂版では、楽章ごとの区分をとり払うことにより、楽章間の流動性がより高められている。それゆえ改訂稿をまとめるにあたり、シューマンは〈交響的幻想曲〉の表題を考えたものの、のちに撤回する。また初稿と改訂版では、曲の長さやオーケストレーションなどが、かなり異なっている。メロディが際立ち、透き通

るような色彩をもつ初稿と比べると、改訂版ではさまざまな楽器が使用され、対旋律がつけ加えられるなど響きに厚みを増している。本日は改訂稿が演奏される。

またこの作品では、第1楽章の素材がすべての楽章で用いられ、作品全体が緊密な結びつきを持っているのも特徴である。

第1楽章 かなりゆっくりと～生き生きと ニ短調。荘重な序奏ののち、活気あふれる主部が続く。弾むような主要主題は、第1楽章の中心的な役割を担う。

第2楽章 ロマンズ：かなりゆっくりと イ短調。重々しいオーボエとチェロの歩みに導かれ、弦楽器が第1楽章の動機を表してゆく。三部形式に則っており、中間部では音楽はいくぶん流麗さを増す。

第3楽章 スケルツォ：生き生きと ニ短調。勇ましいスケルツォ。トリオが2回現れ、第1楽章の動機も登場する。

第4楽章 ゆっくりと ニ短調～生き生きと ニ長調。序奏で第1ヴァイオリンのパートが第1楽章の主要主題を再現。音楽は活気を帯びながら主部に入る。躍動的で柔らかなリズムや音の色使いは、シューマン特有の幻想的な世界を生み出す。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

ドヴォルザーク 交響曲 第8番 ト長調 作品88

作曲：1889年8月29日～11月8日／初演：1890年2月2日、プラハ／演奏時間：約34分

ボヘミア生まれのアントニン・ドヴォルザーク（1841～1904）は、2集からなる〈スラブ舞曲集〉によって爆発的な人気を得て、ヨーロッパ中に知られるようになる。1884年には海を越え、イギリスで彼の演奏会が開催され、多くの聴衆を虜にした。そのような中、交響曲第8番がイギリスの出版社ノヴェロから刊行される。そのため、この作品は「イギリス交響曲」と呼ばれることもあるが、ドヴォルザークによる命名ではない。イギリス国民はドヴォルザークの音楽を深く愛し、彼は何度もイギリスを訪れた。

交響曲第8番は1889年8月にスケッチが始められ、3か月も経たないうちに作品全体の完成をみた。ドヴォルザークは1860年代から交響曲の創作を手掛け、ドイツ・ロマン派からの影響を強くとどめ、第8番の交響曲は自然で伸び伸びとした楽想が曲全体を貫いている。とくにボヘミアの民俗的な表現は、この作品にノスタルジックな色合いを添える。また、第2楽章ではピアノ曲〈詩的な音画〉の第3曲、第3楽章では歌劇〈がんこな連中〉から“若い娘と老人”などの楽想が取り入れられ、彼の他の作品との結びつきも注目される。

楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、弦五部

第1楽章 アレグロ・コン・プリオ ト長調。ト短調の導入部に現れる主題の動機は、ト長調の主部に入っても活用される。ソナタ形式で書かれており、第1主題はフルート独奏の躍動的なリズムが特徴である。

第2楽章 アダージョ ハ短調。ほの暗い旋律を弦楽器がゆっくりと歌い上げてゆく。鳥がさえずるように奏でられるフルートなどによる動機は、楽章のなかで繰り返し用いられる。音楽は、この部分とハ長調に転調する部分を軸に構成されている。

第3楽章 アレグレット・グラツィオーソ ト短調。三部形式に基づいており、第1ヴァイオリンが主旋律をメランコリックに奏でる。舞曲風の主部に続くト長調による中間部は、生き生きとした楽想をもち、コーダでは拍子を変えて快活に登場する。

第4楽章 アレグロ・マ・ノン・トロppo ト長調。トランペットによるファンファーレに始まる。変奏曲のスタイルに基づいており、主題をチェロが提示する。この主題は、第1楽章の第1主題に含まれる動機と関連している。変奏のたびにさまざまな管楽器が用いられ、音楽は祝祭的に結ばれる。

小宮正安 (こみや まさやす)・ヨーロッパ文化史研究家、横浜国立大学教授

R. シュトラウス

交響詩〈ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら〉 作品28

作曲：1894～95年／初演：1895年11月5日、ケルン／演奏時間：約15分

リヒャルト・シュトラウス（1864～1949）は、幾つもの顔を持つ作曲家だ。たとえば大オーケストラを用いて物語や情景を表現する「交響詩」を手がけることで、彼は19世紀末における前衛的芸術家の象徴だった。

「 Rond 形式による昔の無頼漢の物語」という副題を持つ〈ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら〉もその一つ。ティル・オイレンシュピーゲルは、中世ドイツにいたとされる道化であって、身分制度や差別が日常茶飯事だった当時の社会をいたずらによって揺さぶる彼の行動を描いた同名の物語は、多くの庶民から人気を博した。

一見整っているようで、実は矛盾に満ちた社会を変革する……。それが前衛芸術の目標ならば、ティル・オイレンシュピーゲルの物語はシュトラウスにとって格好の素材だったにちがいない。

曲の冒頭、「昔あるところに」と語り

かけるように始まる弦楽器のメロディ（これは曲の最後にも登場する）が、すぐさまホルンと甲高いクラリネットに引き継がれるが、これぞティル・オイレンシュピーゲルのテーマ。その後、市場を混乱させたり、僧侶に扮して説教をぶったり、騎士の格好で美女を口説いたり、俗物学者に論戦を挑んだりと様々ないたずらを繰り返すが、それが祟って絞首刑になるという内容だ。

ちなみに絞首刑の場面は、もともと物語には存在しない（主人公が死刑を危うく免れるというエピソードはあるが）。実はこの交響詩に先駆け、ティル・オイレンシュピーゲルが最後に処刑されるオペラの創作をシュトラウスは考えていた。また、彼の交響詩の多くが主人公の死で終わることを考えるに、「喜劇」の中にさえ「悲劇」を求めた若きシュトラウスの姿が、当作品にも刻み込まれている。

楽器編成／フルート3、ピッコロ、オーボエ3、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、Dクラリネット、ファゴット3、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、ラチェット、小太鼓、トライアングル）、弦五部

R. シュトラウス
4つの最後の歌

作曲：1948年／初演：1950年5月22日、ロンドン／演奏時間：約24分

シュトラウスの幅広いレパートリーには、多数の歌曲も含まれる。しかも彼は、青年時代から幾つものオペラを発表してきただけあって——さらには交響詩をはじめとする大規模な管弦楽作品に精通していたことも手伝って——、通常のピアノ伴奏付歌曲はもちろん、管弦楽伴奏付歌曲も残している。

ピアノ伴奏付歌曲は、サロン等の小さな空間で、限られた聴き手のために演奏されるのが普通だった。ところが19世紀末には、コンサートホールに集う多数の聴衆を念頭に、オペラを彷彿させる劇的な要素を備えた歌曲が生まれるようになる。当時、自他ともに認める前衛芸術家だったシュトラウスが、この状況を見逃すはずもなかった。

そんなシュトラウスが、最晩年に作曲したのが〈4つの最後の歌〉。当時の彼は、ロマン派の伝統を20世紀に伝える音楽界の重鎮だったが、有名なならでは宿命として、ナチス・ドイツの蛮行や第二次世界大戦による未曾有の破壊行為などを一般人以上に痛切に体験せざるをえなかった。そうした中でシュトラウスは、失われた昨日の世

界を生きる自身に向けた鎮魂曲ともいえるこの歌曲を書いたのである。

ただし、この作品の題名のもともとの意味は「4つの最新歌曲」であり、一般的に流布している曲の順番も往年の名ソプラノ歌手であるエリーザベト・シュヴァルツコップ（1915～2006）が広めたものに依拠している。つまり作曲者自身の意図ではなく、第三者の見解が入り込んでいるわけだが、だからこそシュトラウスの音楽による遺言として初演当時から大勢の演奏者と聴衆に受け入れられてきたのだろう。

全体の構成は人生の歩みを想起させ、1946年にノーベル文学賞を受賞したヘルマン・ヘッセ（1877～1962）による『春』『9月』『床につくまえに』、ドイツ・ロマン派を代表する詩人ヨーゼフ・フォン・アイヒェンドルフ（1788～1857）による『夕映えに包まれて』をテキストとしている。特に3曲目と4曲目に登場するヴァイオリン独奏は、シュトラウスの傑作オペラである〈ばらの騎士〉の別れの場面、さらには交響詩〈死と変容〉における死者の浄化の場面を彷彿させてやまない。

楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット3（コントラファゴット持替）、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、ハーブ、チェレスタ、弦五部、独唱ソプラノ

〈4つの最後の歌〉 歌詞対訳

訳：船木篤也

1. Frühling (Hermann Hesse)

In dämmrigen Grüften
träumte ich lang
von deinen Bäumen und blauen Lüften,
von deinem Duft und Vogelsang.

Nun liegst du erschlossen
in Gleiß und Zier
von Licht übergossen
wie ein Wunder vor mir.

Du kennst mich wieder,
du lockst mich zart,
es zittert durch all meine Glieder
deine selige Gegenwart!

2. September (Hermann Hesse)

Der Garten trauert,
kühl sinkt in die Blumen der Regen.
Der Sommer schauert
still seinem Ende entgegen.

Golden tropft Blatt um Blatt
nieder vom hohen Akazienbaum.
Sommer lächelt erstaunt und matt
in den sterbenden Gartentraum.

Lange noch bei den Rosen
bleibt er stehn, sehnt sich nach Ruh.
Langsam tut er
die müdeword'nen Augen zu.

1. 春 (ヘルマン・ヘッセ)

うす暗い墓の底で
ひさしく夢みていた
あなたの木々を 青い風を
あなたの薫りを 鳥の歌を

いまや露わとなった あなた
綺羅をまとい
光がふりそそぐ
まるで奇跡を見るかのよう

私を忘れてはいまい
あなたは優しく手招きをする
わが四肢を貫き 震えている
幸をもたらす あなた!

2. 9月 (ヘルマン・ヘッセ)

喪に服す庭
雨はつめたく花に沈んで
夏はおののく
音もなく 終りを前にして

葉はこがね色 滴りまた滴りおちる
高きアカシアの木より
夏は微笑む 驚いて力なく
絶えゆく庭の夢のほうへ

いまだ薔薇のあたりに
たたずみ 安息を焦がれたる夏
いずれは閉じるであろう
倦んだその眼を

3. Beim Schlafengehen (Hermann Hesse)

Nun der Tag mich müd gemacht,
soll mein sehnlisches Verlangen
freundlich die gestirnte Nacht
wie ein müdes Kind empfangen.

Hände, laßt von allem Tun,
Stirn, vergiß du alles Denken,
Alle meine Sinne nun
wollen sich in Schlummer senken.

Und die Seele, unbewacht,
will in freien Flügen schweben,
um im Zauberkreis der Nacht
tief und tausendfach zu leben.

4. Im Abendrot (Joseph von Eichendorff)

Wir sind durch Not und Freude
gegangen Hand in Hand;
vom Wandern ruhen wir
nun überm stillen Land.

Rings sich die Täler neigen,
es dunkelt schon die Luft.
Zwei Lerchen nur noch steigen
nachträumend in den Duft.

Tritt her und laß sie schwirren,
bald ist es Schlafenszeit.
Daß wir uns nicht verirren
in dieser Einsamkeit.

O weiter, stiller Friede!
So tief im Abendrot.
Wie sind wir wandermüde –
Ist dies etwa der Tod?

3. 床につくまえに (ヘルマン・ヘッセ)

一日がまた終り 疲れがしのび寄る
求めはやる わが心を
星ふる夜よ ころよく
迎えいれよ 遊びに倦んだ子どものように

手よ すべての営みやめよ
額よ すべての思いを忘れよ
あらゆる感覚が いま
まどろみに沈もうとしている

そして魂は もはや見張る者もなく
翼をのびし 漂いはじめる
夜の不思議の輪のなかで
深く 幾重にも生きんがために

4. 夕映えに包まれて (ヨーゼフ・フォン・アイヒェンドルフ)

私たちは 喜びにつけ 苦しみにつけ
手に手を取り 歩んできた
さすらうのは もうやめよう
眼下に 静かの地がみえる

あたりの谷は身を傾け
気は翳りはじめている
昇るは 二羽の雲雀ばかり
昼の夢を追いながら 香気のなかへ

おいで 鳥たちは羽ばたくにまかせよう
じきに眠りのときが来る
私たちはもう迷わない
誰に妨げられることもなく

おお 果てしらぬ 音なき平安!
かくも深く 夕映えに包まれて
さすらいに倦んだ私たち――
あるいは これが死なのか?

R.シュトラウス 家庭交響曲 作品53

作曲：1902～03年／初演：1904年3月21日、ニューヨーク／演奏時間：約44分

シュトラウスの多様性は、レパートリーの広さだけでない。悲劇と喜劇のいずれもこなせる高度な器用さと柔軟性を持ち合わせ、その特徴は交響詩〈テイル・オイレンシュピーゲルの愉快なはずら〉でも聴かれたとおり（だからこそ、全てが滅びに向かってゆくかのような〈4つの最後の歌〉には、シュトラウスの素の顔が晒^{さら}されているとも言えるのだが）。

〈家庭交響曲〉も、悲劇と喜劇との間を自在に行き来したシュトラウスの身のこなしを象徴する1曲だ。というのも当時の彼は、オスカー・ワイルド（1854～1900）の戯曲のドイツ語訳に基づくオペラ〈サロメ〉を発表し、音楽界の一大スキャンダルを巻き起こし、家族の崩壊ともいえる筋書きを、前衛的な音楽に乗せてこれでもかと強調してみせていたからである。さらにシュトラウスは、管弦楽曲の分野でも——喜劇的要素を含んではいるもの——悲劇的色彩の強い交響詩を発表し続け、それは1898年に完成された〈英雄の生涯〉で頂点を極める。さらに〈芸術家の悲劇〉や〈春〉といった作品に取り組むものの未完に終わるという状況の中、彼は一見すると方向転換とも

思える作品を発表する。それこそが、〈家庭交響曲〉だ。

この作品、まずは「交響曲」と銘打たれている点が特徴だ。シュトラウスは若い頃、習作的な位置づけの交響曲を手がけたことはあったが、その後は前衛芸術の象徴ともいえる交響詩に取り組んだ。そうした意味では、〈家庭交響曲〉も音を通じて物語や場面を描くという点で交響詩と同じである一方、18世紀末から19世紀にかけて管弦楽曲の本流と見なされた「交響曲」というジャンルを諷^{うた}い文句にしている。

それでは単なる先祖返りかといえ、さにあらず。そもそも19世紀後半における音楽界の議論には、交響曲＝絶対音楽の伝統を汲む存在 vs. 交響詩＝標題音楽を標榜^{ひょうぼう}する革新的な存在、という考え方が存在したのだが、シュトラウスは〈家庭交響曲〉を通じ、交響曲の中に交響詩の要素を持ち込んだ。これは、例えば彼が敬愛していたエクトル・ベルリオーズ（1803～69）が〈幻想交響曲〉の中で試みたことだが、当時はまだ邪道と見なされていた。

しかも、従来シュトラウスの交響詩の特徴であった悲劇的身振りは〈家庭交響曲〉には聴き取れない。この曲に

おいて彼は、自分と家族（妻と息子）の日常を描いており、自叙伝的作品ということでは、交響詩〈英雄の生涯〉と共通している。ただし〈英雄の生涯〉のメインテーマが英雄の戦いと死であったのに対し、〈家庭交響曲〉では伴侶との間に授かった息子を交えた円満な生活が取り上げられている。

つまりは、シュトラウスがそれまで手がけてきた交響詩、あるいはオペラ〈サロメ〉に代表される悲劇的要素に彩られた作品に対するアンチテーゼこそが〈家庭交響曲〉であると言ってよい。しかも自己批判・自己超克そのものは、進歩進化が信じられた19世紀のヨーロッパでロマン派の芸術家——シュトラウスもその流れに属する存在だった——が好んだものだが、そうした自身の姿勢に見られがちだった悲劇性をもシュトラウスは引っ繰り返す。

そんな当作品の内容だが、第1楽章では夫・妻・息子をそれぞれ象徴する三つの主題が提示される。第1主題が描くのは夫であり、彼の四つの性格（貫禄、夢想、怒りっぽさ、情熱）が、それぞれチェロ・オーボエ・クラリネット・ヴァイオリンによって示される。突然テンポが速くなると、ここからが妻を表す第2主題。ヴァイオリン

と木管楽器を中心に、跳ね回るような勢いのよい音楽で、気の強い彼女の性格（実際シュトラウスの妻がそうだった）が描かれる。オーボエ・ダモーレの演奏で静かに始まる第3主題は息子を示し……といった具合だ。

第2楽章は「スケルツォ」と表示され、両親の幸せや息子の遊ぶ情景が、第1楽章に登場したテーマを様々に変奏することで描写されてゆく。さらに曲が静まると子守唄の場面となり、夜7時を示す時計の鐘が鳴る。第3楽章はゆったりとした「アダージョ」。夫の創作活動・夫婦の愛の情景・夢と妻の気遣い……と、愛情にあふれた夫婦の生活が情緒^{てんめん}纏綿と表されてゆく。朝7時を示す時計の鐘が鳴ると、交響曲の結論部分ともいえる第4楽章のフィナーレ。家族の目覚め・息子の教育方針をめぐる夫婦の言い争いを経て、最後には喜ばしい解決へ至り、目出度し目出度しとなる。

こうして見てくると、従来の交響曲のスタイルをあえて踏襲することで、伝統的な交響曲のあり方も、ひいては自作の来し方も、すべて喜劇的なパロディに仕立て上げたかのようなしたたかさが、当作品の根底に脈打っている。各楽章が交響詩のごとく切れ目なく演奏されるという凝った構成も、また。

楽器編成／フルート3、ピッコロ、オーボエ2、オーボエ・ダモーレ、イングリッシュホルン、クラリネット3、Dクラリネット、バスクラリネット、ファゴット4、コントラファゴット、ソプラノサクソフォン、アルトサクソフォン、バリトンサクソフォン、バスサクソフォン、ホルン8、トランペット4、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（シンバル、タンブリン、大太鼓、トライアングル、グロッケンシュピール）、ハープ2、弦五部

8.27 [土]

8.28 [日]

柴辻純子 (しばつじ じゅんこ)・音楽評論家

ウェーバー

歌劇〈魔弾の射手〉序曲

作曲：1816～21年／初演：1821年6月18日、ベルリン／演奏時間：約10分

19世紀初頭のドイツでは、モーツァルトの〈魔笛〉やベートーヴェンの〈フィデリオ〉といったドイツ語によるオペラ（ジングシュピール）は上演されていたものの、オペラと言えば、伝統的なイタリア語やフランス語の作品が中心だった。

ドイツの作曲家カール・マリア・フォン・ウェーバー（1786～1826）は、11歳で最初のオペラを作曲するなど、早くから音楽的才能を発揮し、作曲家兼ピアニストとして活躍の場を広げた。1812年にプラハの歌劇場の音楽監督に就任し、1817年にはザクセンの宮廷楽長に任命されてドレスデンに移住する。当地の歌劇場からドイツ語オペラを発展させるように依頼されると、長年温めてきた題材の台本化を詩人キントに頼み、歌劇〈魔弾の射手〉を完成させた。初演は、1821年にベルリン王立歌劇場で作曲者自身の指揮

で行われ、大成功を取めた。

物語は、ボヘミアの森を舞台に狩人に伝わる伝説をもとに、悪魔の力に誘惑された狩人マックスと、森林長官の娘アガーテとの愛の勝利が描かれる。愛国的な精神に支えられているだけでなく、ロマン主義文学の要素（自然、人間、魔術、愛など）も盛り込まれたことから、ウェーバーはドイツ・ロマン派歌劇の創始者とされ、後のワーグナーの創作にも大きな影響を与えた。

序曲は、物語の舞台である神秘的な力が宿る奥深い森を思わせる、ゆるやかな序奏（アダージョ、ハ長調）で始まり、4本のホルンが静かな主題を奏でる。快活な主部（モルト・ヴィヴァーチェ）では、不気味にうごめくことから、うねりのある第1主題が爆発し、第2主題はクラリネットに導かれ、歓喜の歌を歌い上げる。最後は、オペラへの期待を高めて大きく盛り上がる。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

モーツァルト
クラリネット協奏曲 イ長調 K.622

作曲：1791年／初演：不明／演奏時間：約25分

名手の存在は、作曲家の創作に大きな刺激を与える。クラリネット奏者で言えば、ウェーバーにとってのベルマン、ブラームスにとってのミュールフェルトがそうであったように、ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756～91）も、ウィーンの宮廷楽団に仕えるクラリネットの名手アントン・シュタードラーの高い演奏技術と楽器の音色に魅了された。

モーツァルトは、18世紀初頭に発明されたこの木管楽器に早くから興味をもち、1771年のイタリア旅行中に書いたディヴェルティメント（K.113）でこの楽器を初めて用いた。しかし楽器本来の魅力に気づいたのは、1784年にシュタードラーと知り合ってからで、以降、オペラや交響曲など様々な作品のなかでこの楽器を活用した。なかでも彼の演奏のために書いた五重奏曲と協奏曲は、古典派のクラリネット作品の最高傑作とされる。

クラリネット協奏曲は、モーツァルトの死の直前に完成したが、第1楽章は、以前に書いたバセットホルンのための協奏曲の一部を改作したものと考

えられている。バセットホルンは、1770年頃に発明されたクラリネットの仲間、普通のクラリネットよりも低い音域を担い、くすんだ柔らかい音色をもっている。モーツァルトはこの楽器を好み、シュタードラーもその演奏に秀でていた。この曲では最低音に近い音域をたっぷりと響かせ、また中・高音域を駆使してクラリネット本来の豊かな表現力を示すなど、鮮やかな対比を作り出している。

第1楽章 アレグロ、イ長調 管弦楽の快活な音楽に続いて、独奏クラリネットが優しい表情の第1主題、短調の副主題を経て息の長い第2主題を奏する。クラリネットは管弦楽とよく溶け合い、充実した音楽が展開される。

第2楽章 アダージョ、ニ長調 弦楽器の伴奏で、独奏クラリネットによる穏やかだが、死を予感させるような主題が始まる。中間部は広い音域を駆けめぐるクラリネットの妙技が光る。

第3楽章 ロンド、アレグロ、イ長調 独奏クラリネットは、軽やかなロンド主題を繰り返す。管弦楽と緊密に結びつきながら、華やかに活躍する。

楽器編成／フルート2、ファゴット2、ホルン2、弦五部、独奏クラリネット

ブラームス

交響曲 第1番 ハ短調 作品68

作曲：1855～1876年／初演：1876年11月4日、カールスルーエ／演奏時間：約45分

ヨハネス・ブラームス（1833～97）は、1876年にようやくの思いで交響曲第1番を完成させた。〈ドイツ・レクイエム〉（1868年初演）の成功によってウィーンでの名声が不動のものとなり、1872年にウィーン楽友協会の芸術監督という荣誉ある地位に就いた。それにもかかわらず、交響曲の作曲においては慎重で、ベートーヴェンへの尊敬の念が強く、改稿と中断を繰り返し、完成まで20年以上の年月を要した。

完成させると直ちに演奏しなくなったブラームスは、旧知の指揮者デッソフに初演を依頼した。細部に至るまで緻密に構成された音楽に、ロマン派の優美な旋律に慣れ親しんでいた聴衆は驚いたようだが、ベートーヴェンの強い影響を受けたこの交響曲は、「国民が誇り得る財産」と高く評価された。

第1楽章 ウン・ポーコ・ソステヌート～アレグロ、ハ短調 ティンパニの連打を伴う緊張感に満ちた序奏に続いて、ソナタ形式の主部は情熱を秘めた第1主題とオーボエの穏やかな第2主題を中心に展開する。最後に序奏の動機が長調に転調して再現される。

第2楽章 アンダンテ・ソステヌート、ホ長調 三部形式の緩徐楽章。ヴァイオリンとファゴットの落ち着いた主題が次第に盛り上がり、中間部はオーボエの魅力的な旋律で始まる。再現部後半のヴァイオリン独奏も美しい。

第3楽章 ウン・ポーコ・アレグレット・エ・グラツィオーソ、変イ長調 ベートーヴェン以来の伝統のスケルツォ楽章に代わって、ブラームスは間奏曲のような優美な音楽を書いた。クラリネットが素朴な主題を歌い、中間部（ロ長調）は活発な音楽となる。

第4楽章 アダージョ～ピウ・アンダンテ、ハ短調～アレグロ・ノン・トロppo・マ・コン・ブリオ、ハ長調 力強い表現のために終楽章のみ3本のトロンボーンが追加される。暗く重厚な序奏は、ためらいながら進み、後半で長調に転じ、ホルンの朗々とした響きがこだまする。主部では、弦楽器で堂々と歌われる有名な第1主題としなやかな第2主題が対比させられ、劇的に盛り上がる。最後は、特徴的なリズムのきざみで開始されるコーダで決然と結ばれる。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部